

# イスラーム信頼学

News Letter No.01

2021



02 ..... ごあいさつ

04 ..... 領域のご紹介

06-12 ..... 計画研究班のご紹介

13 ..... 2020年度の活動報告



「イスラーム信頼学」のプロジェクトが始動しました。これは科研費の「学術変革領域研究」という枠組みの大型プロジェクトです。日本では、これまでイスラーム文明に関する研究が大いに発展してきました。原典資料や現地の文書、フィールドワークなどに基づいた、歴史、宗教、文化、政治、経済の各分野で、緻密な実証的研究が進んできました。世界水準で高く評価される研究も少なくありません。ただ、研究会の議論の場で、あるいは研究者同士でざっくばらんな意見交換の中で、なんとなく大事な、と気になりながらも、正面から取り組んでこなかった問題があります。いえ、「問題」というにはあまりにも根本的であるがゆえ、

総括班メンバー（2021年3月5日）



長岡慎介／太田信宏／近藤信彰  
野田 仁／黒木英充／山根 聡  
熊倉和歌子／石井正子

直面しにくかったのかもしれません。イスラームはなぜここまで広がり、これからも拡大しようとしているのか。宗教がからむかぎり、やれ護教的ではないか、客観性は担保されるのか、こんな否定的な面があるのに無視するのか——こうした声はいくらでも聞こえてきます。私たち自身も常に自問しています。ただ、現在の人口趨勢が続く限り、半世紀後にはイスラームが世界最大の宗教人口になるのは確実です。ならば、7世紀から始まりヨコに、ヨコに広がってきた宗教文明の柔軟さを、各方面から経験科学的な手法で取り組み、その現代的意味をすくいだすべきではないか——他者との間にさまざまな分断が生じている今日の世界において、これは極めて重要な課題だと私たちは考えます。そこでキーワードに据えたのがコネクティビティと信頼構築です。この観点から、イスラーム文明の総体をとらえ返したいと思います。従来の学問の様々な部分を組み替えたり、融合させたりしながら変革的研究を進めます。ムスリムが常に交渉してきたところの非ムスリムも含め、今後の地球社会の長期的なあり方を考える、そんなフォーラムを創り出すことをめざしています。

「イスラーム信頼学」総括班一同

エルサレム旧市街



# イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築

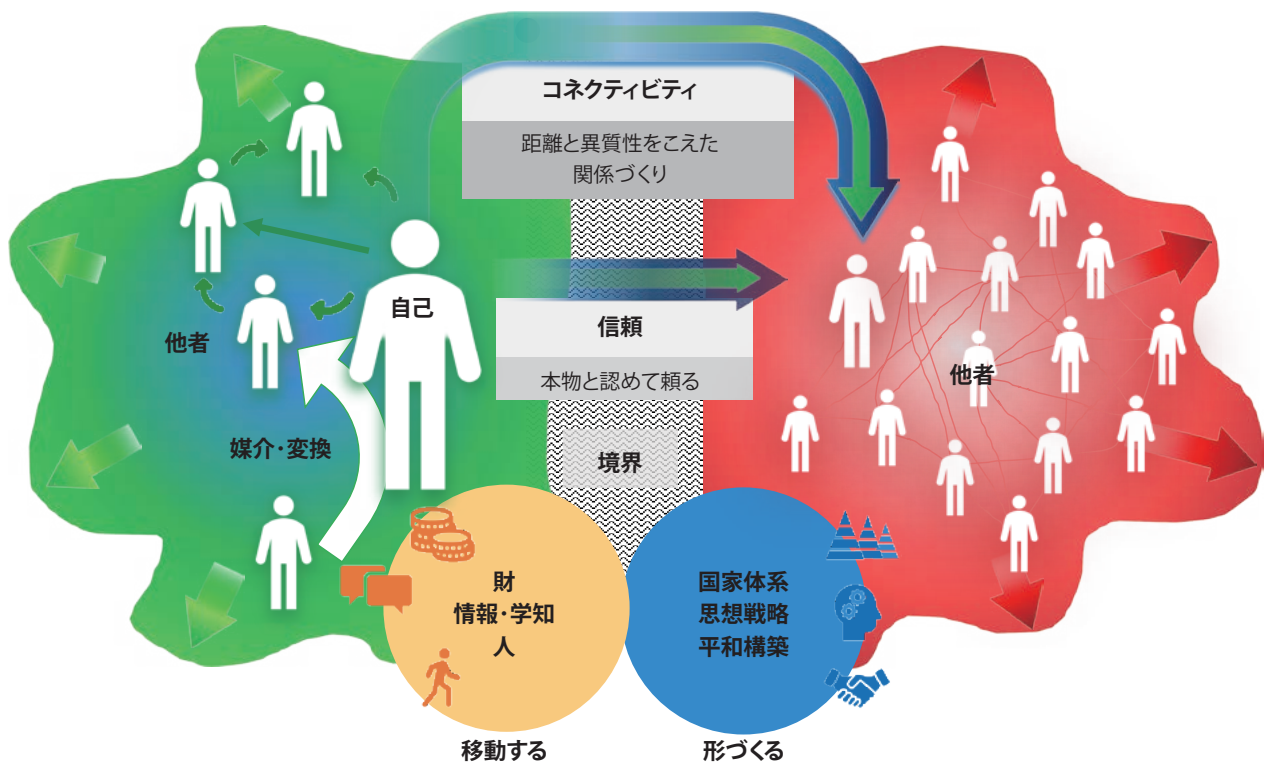
## 世界の分断をのりこえる戦略知の創造



領域代表  
**黒木英充**  
 東京外国語大学  
 アジア・アフリカ言語文化研究所 教授

イスラーム文明には水平方向の人間関係づくりに長けてきた特質があります。そのコネクティビティ（関係づくり）の蓄積と信頼構築の諸相を明らかにするとともに、そこから得られる「暗黙知」を、言語化・可視化して「戦略知」として表現し、現代世界にて深刻化する分断状況を解決するための新たな視座を確立すること、これが本プロジェクトの目的です。イスラームを軸にして、コネクティビティの現場で信頼が創り出されるプロセスを、イスラームが始まってから今日までの1400年の時間と、地球全体の空間とを視野に洗い出します。こうした問題は、イスラーム研究者が何となく意識しつつも、研究の俎上に載せてこなかったものです。また従来の信頼研究においても取り

イスラーム文明——多民族・多宗教 1400年のヨコへの広がり





上げられていない、新しい研究領域です。この変革的な領域の課題に対して、諸学問分野の研究者が協働して取り組む、地域研究の大規模プロジェクトです。

イスラーム文明は、人々が広く高い移動性の中で暮らす社会で発展してきました。モノ・情報・人の移動を、「イスラーム経済」「言語・学知の変換」「移民・難民」のコンネクティビティの観点からとらえます（A01, 02, 03班）。多元的な文化的環境の中に存在する、様々な境界をどのように越えるのか、他者との間にどのように信頼を構築するのか、がテーマです。

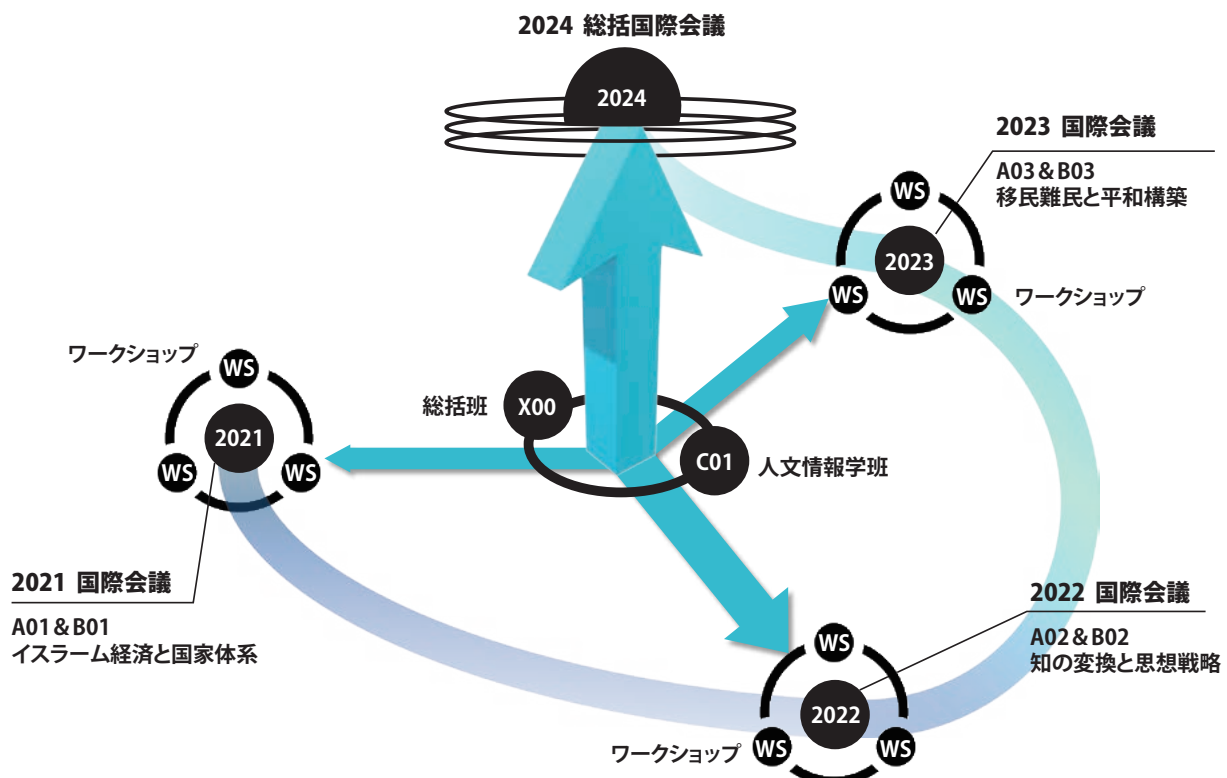
また、信頼が構築される際の、より高い次元での交渉の問題を、「イスラーム国家体系」「思想戦略」「平和構築」の観点から扱います（B01, 02, 03班）。ときに

対立関係にある他者との間でも、したたかな関係づくりにより信頼を構築してきた戦略知を、過去から現在の様々な局面の中に探索します。

さらに、近年進展の著しい人文情報学の成果を取り入れ、これらの観点から明らかにされる暗黙知を「見える化」することに挑戦します（C01班）。この作業を通じて、コンネクティビティと信頼構築の研究における新たな問題発見も期待されます。

世界各地でイスラームをめぐる社会の分断や分極化が深刻化するなか、本研究が明らかにする「戦略知」は、今後の日本の針路にとって重要な、正確なチャートを描くために不可欠なものになる、と確信しています。

## 今後の計画



# イスラーム経済のモビリティと普遍性



研究代表者

**長岡慎介**  
京都大学

## 研究分担者

**五十嵐大介** 早稲田大学  
**岩崎葉子** アジア経済研究所  
**亀谷 学** 弘前大学  
**小茄子川歩** 京都大学  
**平野美佐** 京都大学  
**町北朋洋** 京都大学  
**安田 慎** 高崎経済大学

本研究は、「イスラーム経済」と呼ばれるイスラームの理念にもとづく経済活動の歴史的实践および現代に再登場したその実践に着目し、そこで見られる特有の経済制度（貨幣・金融、市場、所有制度）の独自性と普遍性を比較経済史的観点から解明することをめざすものです。

近代の夜明けとともに近代資本主義が浸透していったイスラーム世界では、20世紀半ばごろから、独自の経済システムを再興しようとする知的営為が始まりました。その取り組みは、1970年代のイスラーム金融を皮切りに、食品、日用品、ファッション、観光、福祉といった様々な産業で具現化してきています。

こうした現代イスラーム経済の実践は、単にイスラームの教義や歴史的イスラーム経済実践にもとづいているのではなく、歴史的にも同時代的にも多元的な起源を持っています。歴史的な起源の多元性については、歴史的イスラーム経済実践が、東西に広がるイスラーム世界各地の慣習や近接する文明圏（アジア、アフリカ、ヨーロッパ）の経済実践との相互交流の中で、他地域の制度を移植したりイスラーム的に再編成したりすることで形成されてきた歴史を辿ることができます。

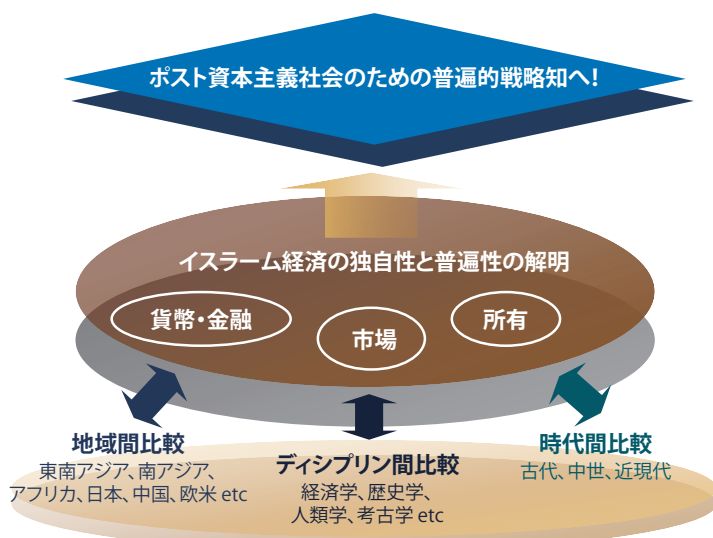


現代イスラーム経済の代表的取り組みであるイスラーム金融のATM（2018年12月、マレーシア、クアラルンプール、長岡撮影）

他方、同時代的な起源の多元性については、現代イスラーム経済の実践が、アジア・アフリカ地域に根付く様々な慣習的制度や世界各地のアンチ／ポスト資本主義的運動、時には近代資本主義そのものを巧みに吸収・再構築しながら、近代資本主義のオルタナティブたる経済システムを構想してきた軌跡を辿ることができます。さらに、イスラーム経済は高い汎用性を持ち、その知恵（本研究ではイスラーム経済知と呼ぶ）や制度がある種の普遍性を持つことで、他地域や他文明圏の新しい経済実践の誕生にも寄与してきました。

このようにイスラーム経済は、イスラーム文明特有の水平的コネクティビティを存分に生かしながら、多様な価値や実践を坩堝のように飲み込み、かつ、そこで育まれた経済知や制度を惜しみなく他者に供与するダイナミズムの中で実践が行われてきています。こうした動態を、本研究ではイスラーム経済のモビリティと呼ぶことにしたいと思います。

近代資本主義の行き詰まりが本格化する今日、イスラーム経済はポスト資本主義社会を構想するための有力な参照軸の1つと考えられ始めています。それは、イスラーム経済知をイスラーム世界の経済力向上のためだけでなく、地球社会全体のよりよい未来を構築するための人類全体の知的遺産として普遍化して活用していこうというものです。本研究では、イスラーム経済の独自性と普遍性を解明する比較経済史的研究を踏まえて、イスラーム経済が普遍的戦略知としてポスト資本主義時代の地球社会システムの構築のためにどのような貢献ができるかを、他地域・他文明圏の様々な経済知と比較・協働しながら探究することをめざしたいと思います。





研究代表者

野田 仁

東京外国語大学AA研

## 研究分担者

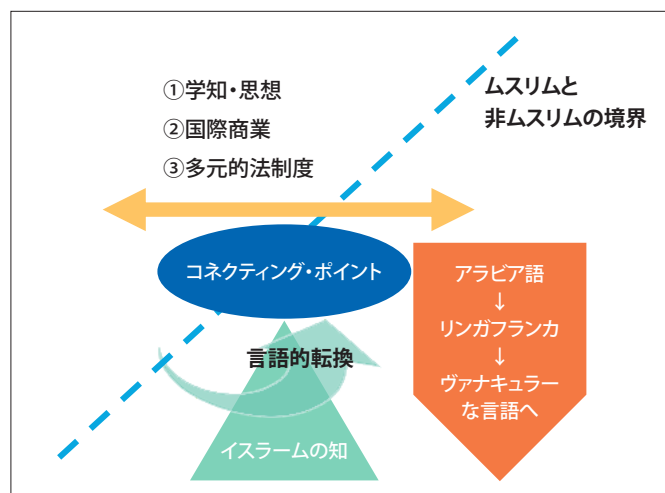
高野さやか 中央大学  
 高松洋一 東京外国語大学AA研  
 坪井祐司 名城大学  
 中西竜也 京都大学  
 濱本真実 東洋文庫  
 矢島洋一 奈良女子大学  
 和田郁子 岡山大学

本研究班は、イスラームの知とその変換・翻訳に注目します。とくにイスラームの東方への発展の過程において、どのような知が、研究領域全体が射程に入れているイスラーム的コネクティビティ・秩序維持・ネットワーキングを可能にしたのかを問い直します。そのために、イスラームの中心とすべき中東・西アジアを離れた、辺境のイスラームを事例に検討します。境界的な領域では、イスラーム教徒（ムスリム）と外部（非ムスリム）との接触が重要な意味を持っていたからです。

イスラームの拡大過程において、イスラームの知は「変換」され得るものであり、その「知の変換」・「翻訳」の役割も重要だと考えます。ここで言う翻訳とは、元来アラビア語によってコード化されているイスラームの諸相（教義、慣行も含め）が、拡散にともなってローカルな言語に変換されることを指しています。地域の有力な言語—ペルシャ語、ムラユ（マレー語）、オスマン＝トルコ語、チャガタイ＝トルコ語などのリングフランカーからさらに小規模な言語への翻訳も検討に値するでしょう。このような位相を見るために、変換が先鋭的に表れる場として境界領域に焦点を当てることができます。

境界論や地政学の理論も参照しつつ境界領域における移動・越境とそれにともなう「知の変換」に意識を向け、そこに信頼構築を重ね合わせると、以下のような学知・商業・（司）法の3局面を設定できます。

- ①イスラーム思想・学知の展開＝とくにイスラームの伝播の過程における他者との接触に由来する、イスラームの再解釈、融和的言説などを分析します。
- ②国際商業＝境界上での取引・交渉を、ムスリムによる仲介の視点から、貿易にかかわった通訳者の問題も交えて明らかにします。
- ③多元的法制度＝エスニック集団・民族集団・国家の境界における紛争解決・紛争回避メカニズムを明らかにします。シャリーアを含む慣習法と帝国法・現代の成文法とのせめぎあいも考察の対象に含んでいます。



馬を売るカザフ人たち（2009年2月、中国新疆ウイグル自治区伊寧市、野田撮影）

この3つの研究軸について、現代の状況も視野に入れながら、本研究を構成する8名の研究者が横断的にとりくむ予定です。全体として、さまざまな地域における知識・情報の言語的な変換の過程を明らかにし、それらに凝縮されたコネクティビティの知恵をあぶり出しつつ、世界のネットワーク化の過程を考察することを目指しています。

ここに掲載する写真は、中国新疆北部の大都市イリ（伊犁、現在の伊寧）近郊の馬市場です。このような市場は、カザフ人の家畜を買い求める都市の住民—ウイグル人などのムスリムから漢族まで多様な人々の交渉の場となっています。本研究では、こうした多言語空間で生じる商取引、交渉、信頼構築に注目し、このイリのような境界における結節点となる地点もコネクティング・ポイントとしてクローズアップするつもりです。



研究代表者

黒木英充

東京外国語大学AA研

## 研究分担者

池田昭光 明治学院大学

岡井宏文 共愛学園前橋国際大学

長 有紀枝 立教大学

昔農英明 明治大学

中野祥子 山口大学

子島 進 東洋大学

村上忠良 大阪大学



岐阜パープルスラーム・モスク開堂式（2008年、岡井宏文撮影）

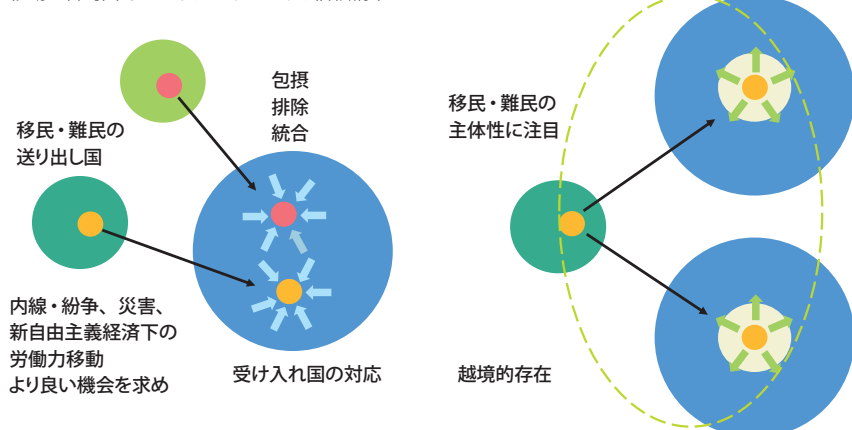
今日の世界の移民・難民問題におけるムスリムのプレゼンスは、圧倒的です。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によれば、2019年末の世界の難民はおよそ2600万人で、660万人のシリア難民をはじめ、ベネズエラ、アフガニスタン、南スーダン、ミャンマーの難民だけで全体の3分の2を占めています。さらに別枠でパレスチナ難民が550万人います。大半がムスリム難民であるか、ムスリムが絡んだ形の難民なのです。

移民と難民は異なる概念でありつつ、その法的な位置づけは国によってさまざまで、両者の境界も曖昧です。移民の正確な世界的統計は存在しませんが、ここでもムスリムの割合が無視できないのは疑いありません。

一方、イスラームの歴史は、最初から人の移動が刻印されています。イスラーム暦元年（西暦622年）は、メッカで迫害された預言者ムハンマドがメディナに移った「ヒジュラ」（聖遷）の年ですが、アラビア語の「移民」を意味する「ムハージュール」もヒジュラと同じ語源から出ています。巡礼、遊牧、長距離商業、学問遍歴など、ムスリムは移動が当たり前の社会・文化の中で生きてきました。

では、今日の移民・難民の問題はこうした過去の高い移動性の延長線上にどのように位置づけられるのでしょうか。

## 移動の各局面でのコネクティビティと信頼構築



16億人とも言われるムスリムは、移民・難民として今や世界のすべての地域に拡散し、生活の足場を築き、その人口を増やしています。これまで移民・難民に関する研究は、それを受け入れる側がいかにして社会の中に排除することなく包摂・統合するか、が主要なテーマとなってきました。世界的に排外主義の高まりがみられる今日、こうした研究はますます重要です。人口減少が急速に進むなか、事実上の移民を「外国人労働者」としたまま問題にきちんと向き合っていない日本においてはなおさらです。

今後はさらに、ムスリムの移民・難民が主体的に周囲の人々と関係をつくりだし、文化的・社会的な差異や壁を乗り越え、時には遠く空間的な距離を越えてつながりを獲得する局面も重要になります。そこでイスラーム文明における関係づくりの歴史的な経験がどのように作用しているのか、そして現在、どのような挑戦が新たにされているのか、が問題です。つまり、移民・難民がいかにして信頼を構築しようとしているのか、それに受け入れ社会の側がどのように応えようとしているのか、を考える必要があります。ときには摩擦や対立を生じさせつつも、イスラームのコネクティビティに共鳴するような、受け入れ社会の側のコネクティビティについても明らかにする必要があります。

私たちは、こうした問題意識のもと、日本、東南アジア、中東、欧米の地域を中心に調査・研究を展開しながら、移民・難民にかかわるコネクティビティの暗黙知を引き出し、そこで重層的かつ越境的に形成されるコミュニティがどのようなものか、明らかにしたいと考えています。



# イスラーム共同体の理念と国家体系



研究代表者

**近藤信彰**

東京外国語大学 AA 研

## 研究分担者

**秋葉 淳** 東京大学

**太田信宏** 東京外国語大学 AA 研

**沖祐太郎** 九州大学

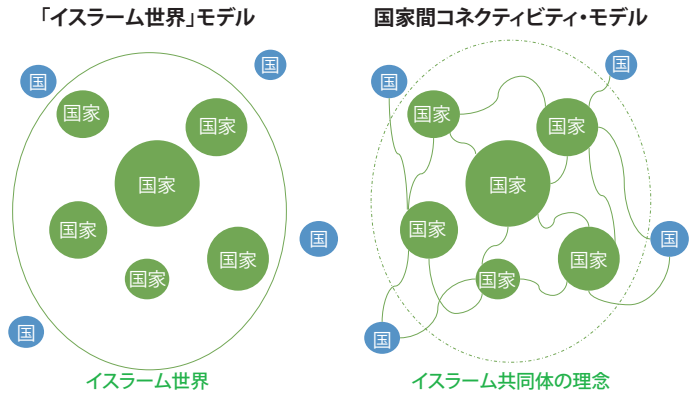
**長縄宣博** 北海道大学

**馬場多間** 立命館大学

**堀井 優** 同志社大学

**真下裕之** 神戸大学

**黛 秋津** 東京大学



イスラーム圏の国家体系を考える二つのモデル

本研究はコネクティビティと信頼の観点から、歴史的な中東、東ヨーロッパ、地中海、インド洋、インド亜大陸の諸国家とその相互関係を考察するものです。コネクティビティは水平的関係であるのに対し、国家は通常垂直的なものとして捉えられます。伝統的な歴史学は、第一に、これらの地域に存在した個別の国家とそれが支配する社会を対象としてきました。かつて、エドワード・サイードが酷評したように、従来、イスラーム圏の歴史の概説は、個別王朝史の集合に過ぎませんでした。史料研究が飛躍的に進歩した近年でも、研究の中心となる史料が、叙述史料にしても文書史料にしても王朝単位でまとまっていることもあって、こうした傾向は完全に克服されてはいません。しかし、これらの諸国家を実際に支えたエリート層を見るならば、彼らがしばしば、広大な帝国の各地方やさらには国外にまでおよぶネットワークを持っていて、赴任や移住を行いながら活動を続けてきたことがわかります。本研究はまず、水平的エリートのネットワークがいかに垂直的な国家に作用してきたかを明らかにします。

次に、個別の国家を越えて、どのような単位でこれらの地域を考察すべきでしょうか。現在の国民国家群でなければ、

かつては「イスラーム世界」というのが歴史の語りの単位でした。しかし、この単位は、イスラーム共同体の理念の反映か、近代西欧にとっての他者としてのイメージにすぎず、学術的かつ実証的な検討をした上で採用された単位ではありませんでした。しかも、「イスラーム世界」を語るといながら、実際には広大な時空間のごく一部を恣意的にとりあげて、代表させてきたのです。これに対して、本研究は、こうしたイメージ先行の前提を退け、具体的な歴史事象から諸国家間関係を検討し、実際の諸国家間のあり方から、当時、どのような国家体系が存在したのかを問うものです。すなわち、モデルの右図に示したように、「イスラーム世界」を所与の前提とするのではなく、理念としてのイスラーム共同体の存在は考慮しつつも、個々の国家間の関係の延長として国家体系を捉えるのです。

さらに、現実の国家体系が理念上のイスラーム共同体がいかなる関係にあったか、を追求します。イスラーム法は基本的に、単一のイスラーム共同体を前提に構成されているにもかかわらず、現実のイスラーム圏は、8世紀以降今日まで、常に複数の政治権力を抱えてきました。パン・イスラーム主義のような運動は存在しましたが、現実にはこの複数の政治権力が、時には対立し、時には交渉しながら、共存してきたのです。



外国使節を迎えるアッバース2世 チェヘルストーン宮殿壁画(イラン)

これら諸政治権力は、いかなる原理で共存したのでしょうか。これら諸国家を統べる国家体系はいかなるものであったのでしょうか。コネクティビティの観点から個別の国家間関係を実証的に分析していくなかで、そのコネクティビティ連鎖の先にある、イスラーム国家体系を明らかにします。



研究代表者

山根 聡

大阪大学

## 研究分担者

青山弘之 東京外国語大学

飯塚正人 東京外国語大学AA研

池田一人 大阪大学

工藤正子 京都女子大学

菅原由美 大阪大学

中溝和弥 京都大学



南アジアのウルドゥー語で書かれた現代イスラーム復興思想に関するマウドゥーディー (1903-79) の著作のアラビア語訳

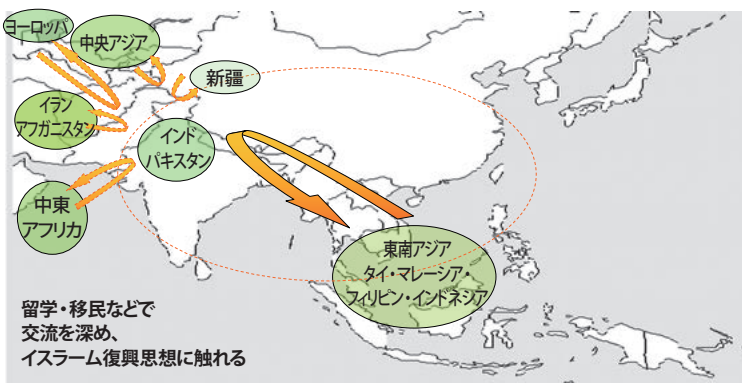
「ミャンマーのロヒンギャをめぐる問題」「シリア情勢をめぐる国際社会の確執」「南アジアにおける宗教間対立」「日本やヨーロッパにおけるムスリム移住者あるいは婚姻等によるムスリム改宗者をめぐる課題」など、現代世界においてムスリムが関係している喫緊の課題について、特にその思想をめぐる影響関係や伝播の動態について、ムスリムと非ムスリム双方の視点から考察します。これにより、ムスリムの宗教思想が、紛争解決のためにいかに戦略的に交錯し、信頼構築に向かっているかを解明します。ムスリムの行動は、宗教的に正当であることが最も重要です。その行動指針はムスリムの義務である「六信五行」のうちの根幹となる神の唯一性と預言者ムハンマドを信じる点に集約されます。この基本部分を信じている者同士でのつながりが、ムスリム間の信頼構築の根幹です。

ただ、その信仰がゆるぎないものであるとしても、さまざまな新たな事象が起こっている現代世界において、一つ一つの事象に対していかなる行動をとるかは、全てのムスリムが確信を持っているとは言えません。そこで彼らは、宗教家らの見解が書籍やメディアでの発言されることなどによって宗教的正当性を確信することがあります。それは、食事のハラールを巡る問題や移住先での異教徒との婚姻などをめぐる問題、クルアーンをダウンロードしたスマホをズボンのポケットに

入れているのか、といった日常生活をめぐる問題から、遠く離れた地域でムスリム同胞が圧迫を受けている時にどのように対処すべきか、イスラーム国家として非ムスリム諸国とどのような関係構築が求められるか、といった国際問題まで、ムスリムが直面する多岐にわたった問題の宗教的解釈が、誰によってどのようになされ、それがどのように伝えられたか、といった流れを把握することで、ムスリム同士がいかに信頼を構築してつながっていくかを明らかにします。つまり、研究の手法としては、思想そのものを研究する、というだけでなく、その思想が翻訳や留学などを、人を介していかに伝わっていったかなど思想の伝播におけるムスリムのコネクティブティを、戦略として明らかにしていきます。(図)

ムスリムが自身の活動の宗教的正当性に絶対的確信を持っていれば、行動に対する悩みは持たなくて済みます。しかし、複雑化・多様化する現代社会においてはいったいどの行動が宗教的に正しいかが解釈によって異なってくることがあります。本計画研究では、こうしたムスリムの「悩み」を解決する思想の成り立ちを明らかにすることを目標としています。これによって、世界各地のムスリムがいかに協調、連帯するかという過程が明らかになります。もちろんこの課題は、信頼構築のみならず、信頼関係を損なう思想も研究対象としなければなりません。暴力を肯定する解釈はどのように生まれ、どう広まったかを明らかにすることもまた、そうした集団の中での信頼関係を醸成する仕組みを解明することになります。研究対象地域は、世界最大のムスリム人口を抱えつつも、非ムスリムとの軋轢によるテロなどの暴力を巡る問題が発生している南アジアや東南アジア、そしてムスリム同士の対立によって内戦などを引き起こしたり、イスラーム諸国を含む国際社会の干渉が続く中東、そして新たなムスリム移民を受け入れているヨーロッパ(特にイギリス)や日本とします。

現代ムスリムのコネクティブティの事例——非アラブ圏での交流





研究代表者

石井正子

立教大学

## 研究分担者

小副川琢 日本大学

日下部尚徳 立教大学

熊倉 潤 アジア経済研究所

佐原徹哉 明治大学

鈴木啓之 東京大学

武内進一 東京外国語大学

飛内悠子 盛岡大学

見市 建 早稲田大学



フィリピン国軍とISラナオとの間で展開された市街戦の跡、マラウィ市（ミンダナオ島）2017年

近代国家成立以降、ムスリムは国家を単位として非ムスリムとの関係性構築を模索する一方で、国境を超えて他地域のムスリムとつながる運動を繰り返してきました。イスラーム圏の周縁部で成立した国家では、例えばフィリピン南部のように、政治的、経済的、文化的権利を奪われたマイノリティのムスリムが武力紛争を展開する動きが見られました。また、ウイグル人のように国家から迫害と排除の対象となったり、パレスチナ人、ロヒンギャ人のような暴力に対する抵抗や、避難と帰還を繰り返している人びともいます。

近代国家の成立は同時に、イスラームを思想的基盤とした政体を構築する国境を超える運動の展開を促してきました。イスラーム主義の運動です。ウェストファリア体制成立以降の国際社会では、国家はしばしば国益を優先してきました。こうしたことへの落胆は、イスラーム主義へ信奉者を増やし、新たな分断とつながりを形成しています。

このようにムスリムと非ムスリムの共存が政治争点化した紛争影響地域では、域外のイスラーム諸国・社会とのコネク

ティビティを活性化させてきました。このような背景に鑑みますと、イスラーム圏やその周辺で生じている武力紛争と平和構築、その結果として模索されている新しい秩序形成を理解するためには、イスラーム圏が水平方向に形成してきたネットワークを視野に入れることが重要であることが分かります。

そこで本研究では、ムスリムと非ムスリムの共存、または異なるイデオロギーのムスリムどうしとの関係性が政治争点化した紛争影響地域を対象に、コネクティビティをキーワードに研究調査を行います。紛争影響地域の人びとが越境して互いの経験を交換し、非ムスリムや域外のムスリムと信頼・平和を構築する諸相を、以下の三つの観点から検証します。

## ①非ムスリムとの信頼・平和構築の検証

## ②イスラーム圏のコネクティビティ活性化による支援と保護の検証

## ③異なるイデオロギー間の対話・仲介の検証

検証にあたっては、東南アジア、南アジア、東アジア、中東、バルカン、アフリカの紛争影響地域でのフィールド調査を実施し、

実証的な比較研究を行います。これらの検証を通じて明らかになったことを総合的に考察し、イスラーム圏のコネクティビティが形成する非ムスリムとの信頼・平和構築の戦略知を可視化し、新たな秩序形成の過程として明らかにすることを目的とします。

## 非ムスリムとの信頼・平和構築の検証

- ・南北スーダン  
飛内悠子/人類学
- ・バルカン  
佐原徹哉/比較紛争学
- ・フィリピン南部  
石井正子/紛争研究
- ・コンゴ民主共和国、サヘル地域  
武内進一/国際関係論

## コネクティビティ活性化による支援と保護の検証

- ・バングラデシュにおけるロヒンギャ人  
日下部尚徳/国際協力論
- ・中国におけるウイグル人  
熊倉潤/国際政治学
- ・レバノン、シリア  
小副川琢/国際政治学
- ・イスラエル/パレスチナ  
鈴木啓之/国際関係論

## 異なるイデオロギー間の対話・仲介の検証

- ・インドネシアにおけるイスラーム主義の台頭  
見市建/比較政治学
- ・バルカンにおけるイスラーム主義の台頭  
佐原徹哉/比較紛争学

## 2020～2021年度

- ・文献調査、情報収集
- ・次年度以降の調査準備：合同研究会、合同海外フィールド調査、各自の海外フィールド調査

## 2022年度

- ・各自の海外フィールド調査
- ・中間報告：北米中東学会などの国際会議での報告

## 2023年度

- ・海外フィールド調査の結果に基づいた比較研究
- ・A03（移民難民）班と共同の国際会議開催

## 2024年度

- ・追跡海外フィールド調査
- ・研究成果および現地還元：総括国際会議での発表、英文叢書の出版

# デジタル・ヒューマニティーズ的手法による コネクティビティ分析



研究代表者

熊倉和歌子

東京外国語大学AA研

## 研究分担者

新井和広 慶應義塾大学

石田友梨 岡山大学

伊藤隆郎 神戸大学

後藤 寛 横浜市立大学

篠田知暁 東京外国語大学AA研

永崎研宣 人文情報学研究所

MALLETT Alexander 早稲田大学

現在、ITとビッグデータ分析の飛躍的な進歩にもなあって、知のパラダイム転換が起ころうとしています。その一つは情報のデジタル化と可視化への注目です。このような変化を背景にして、国内外において人文情報学(デジタル・ヒューマニティーズ)の分野が新たな学問領域として確立され、アルゴリズム的手法による人文知の再編が進められています。ここでは、既存の人文学分野に新たな手法を提示し、大量の情報の分析を可能にするなどの方法論的パラダイムにとどまらず、デジタルという新たな地平に放り込まれた情報やそこから積み上げられる学問知が、細分化された分野の垣根をこえて交流しはじめています。本研究は、国内外において見られるこのような人文情報学の基盤を大いに活用しながら、そこにおいて研究が進められている分析手法をイスラーム文明における社会関係の可視化分析に応用し、一定のモデル化を試みようとするものです。

この研究課題において、可視化分析とともに重視するのは、可視化のプロセスです。たとえば、コネクティビティを可視化

するには、「コネクティビティ」をいかに定義するかという問題がつきまといまいます。コネクティビティの現場で生じ・コネクティビティを強化する「信頼」についても同様のことが言えるでしょう。そこで、本研究の課題は、可視化を通じた「コネクティビティ」や「信頼」に関する意味論的分析であるとも言えます。そして、その背景には、二つの方法論的な問題があります。それは、電子回路のオン・オフのように一義的にはとらえることのできない人間関係とそれらの集合である複雑な社会ネットワークをどのように可視化するかという問題、そして、その中に「信頼」をどのように見いだすかという問題です。

このような問題意識のもと、C01は、イスラーム文明において残されてきた人名録/伝記集に着目し、テキストマイニングの手法により、テキストに表される「コネクティビティ」と「信頼」を可視化分析します。このとき、イスラーム文明の地理的範囲が広範に亘ることに留意し、研究分担者がインド洋海域・南アジア地域、東アラブ地域、西アラブ地域をカバーします。さらに、異なる地域や文字を扱う研究協力者を加え、イスラーム文明が包含する地域・文字・言語の多様性についても考える機会とします。各地域のテキストを突き合わせ、その共通点と相違点を探ることにより、「コネクティビティ」や「信頼」関係の多様性・多義性ととも、「イスラーム的」なそれらのあり方についても検討します。また、GISやテキスト分析などの方法を応用しながら、テキストから網の目のような人間関係を抽出し、時空間の中で表現する方法を提案・開発します。加えて、C01は可視化分析の手法の応用という観点から、他班の研究にも積極的に関わっていく計画です。



## 1. 総括班事務局より

## ●総括班事務局の体制

事務局運営：太田信宏、野田仁、熊倉和歌子

事務局職員：

村瀬智子



畑尾朋子



事務局所在地：183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所6階(605室)

事務局連絡先：connectivity\_jimukyoku@tufs.ac.jp

## ●広報媒体

ウェブサイト <https://connectivity.aa-ken.jp/>

ウェブサイト内ブログへの投稿を随時受付しております。

Blog # 1 黒木英充「小さな驚きから」<https://connectivity.aa-ken.jp/newsletter/91/>Twitter (Thiqa project) <https://twitter.com/ThiqaProject>

## ●人材公募

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ではプロジェクトに携わる特任助教1名および研究機関研究員3名の公募を行いました(公募期間2020年12月22日～21年2月1日、21年4月着任予定)。

## 2. 2020年度に開催した研究集会・打ち合わせなど (※注記のないものはすべてオンライン開催/一般公開)

## 全体集会

## ◆2021/1/9

## 第1回全体集会(非公開)

1. 領域代表挨拶
2. 各研究班ほかの紹介
3. 総括班事務局よりアナウンス
4. 今後の計画・構想
5. 質疑応答

## ◆2021/1/29

「イスラーム信頼学」科研  
公募研究説明会

## ◆2021/3/5

「イスラーム信頼学」  
キックオフ・シンポジウム

黒木英充「ごあいさつ」

長岡慎介「イスラーム経済のモビリティと

そのポスト資本主義的前望性」

中西竜也「中国ムスリムによる親中国的な  
イスラーム洗練を再考する」子島進「グローバル近所：大塚モスクの  
事例から」近藤信彰「宗派的分断を乗り越える戦略  
知：外交、戦争、イスラーム法」山根聡「越境のコネクティビティが導く思  
想の翻訳」日下部尚徳「バングラデシュ政治における  
イスラームとロヒンギャ：ロヒンギャは同  
胞か難民か」伊藤隆郎、熊倉和歌子「デジタル・ヒュー  
マニティーズとイスラーム史研究の展望」  
質疑応答・ディスカッション

## ワークショップ

## ◆2020/12/28

## 2020年度第1回研究会 A02

1. 野田仁 研究班の趣旨説明
2. 野田仁「接続点」としてのイリーエス  
ニシティ、貿易、司法
3. 総合討論
4. 研究打ち合わせ(非公開)

## ◆2021/1/22

フィールドサイエンス・コロキウム  
「歴史ビッグデータ研究の現在と未来」  
C01 ほか

1. 趣旨説明
2. 北本朝展(ROIS-DS人文学オープンデー  
タ共同利用センター/国立情報学研究所)  
「歴史ビッグデータ：過去の記録の構造化  
に基づくデータ駆動型人文学研究」

3. 西村 陽子(東洋大学)「シルクロード遺跡の再発見：東洋文庫アーカイブと遺跡データベースの構築」

4. 加納靖之(東京大学地震研究所)「みんなで翻刻と歴史地震研究」

5. ディスカッション

#### ◆2021/2/4

##### ワークショップ

「ウラマーのコネクティビティを可視化する：コンピューターによる分析の展望と課題」

C01, B01

1. 趣旨説明

2. 熊倉和歌子「15世紀人名録『輝ける光』デジタルテキスト作成の試み」

3. 太田(塚田) 絵里奈(慶應義塾大学)「サハーウィーの伝記記述にみえる「負」のコネクション」

4. ディスカッション

#### ◆2021/2/11

##### ワークショップ

「イスラーム文明的国家体系の解明にむけて」A01, B01

近藤信彰「イスラーム文明的国家体系の解明にむけて」

コメント(亀谷学)・ディスカッション

#### ◆2021/2/15

##### ワークショップ

「“ヒストリカル・デジタル・グローブ”(GIS)のアイデアと展望」

C01, A01, B01

後藤寛・土田雅代(Esriジャパン社)「ヒストリカル・デジタル・グローブのパイロットモデルについての説明」

ディスカッション

#### ◆2021/2/22

##### ワークショップ

「『イスラーム主義』の波紋：

フィリピン南部とフランスの事例」

B03, B02

1. 石井正子「新バンサモロ自治政府設立に向けた課題：非モロ先住民との共存、イ

スラム主義の台頭、MNLF(モロ民族解放戦線)」

コメント・ディスカッション

2. 佐原徹哉「フランスの『反分離主義法案』がもたらした国際的波紋：穏健派イスラム主義者をエンパワーすることはサラフ主義の抑制につながるか？」

コメント(飯塚正人)・ディスカッション

#### ◆2021/2/24

##### ワークショップ

「移民のコネクティビティと信頼構築」

A03, B01

黒木英充「レバノン・シリア移民のコネクティビティと信頼構築」

コメント(長縄宣博)・ディスカッション  
モデレーター：池田昭光

#### ◆2021/3/4

##### ワークショップ

「移民の貿易業と社会貢献」

A03, B02

福田友子(千葉大学)「南アジア系移民起業家による中古品貿易業と社会貢献活動の可能性：パキスタン人起業家を中心に」

コメント(工藤正子)・ディスカッション

#### ◆2021/3/12

##### ワークショップ

「移民難民研究と異文化間心理学」

(限定公開) A03, B03

中野祥子「【研究紹介】在日ムスリム留学生の異文化適応：異文化間心理学の視点から」

コメント(石井正子)・ディスカッション

#### ◆2021/3/16

##### ワークショップ

「ムスリムと非ムスリムの

多元的な関係：中央アフリカ、マリ、コンゴ民主共和国、南北スーダン」

(限定公開) B03, B02

1. 武内進一「サハラ以南アフリカにおけるムスリムと非ムスリムの紛争—中央アフリカを中心に」

コメント(中溝和弥)・ディスカッション

2. 飛内悠子「ハルツームの移住者地区から見る南北スーダン間の多元的な信頼関係」

コメント・ディスカッション

3. 次年度の計画打ち合わせ

#### ◆2021/3/18

##### ワークショップ

「東南アジアと中央アジアの法の多元性比較」A02, B02

1. 高野さやか「法をめぐるカテゴリーへの視点—インドネシアにおける地方裁判所の民族誌的研究から」(仮題)

コメント(菅原由美)

2. 野田仁「中央アジアにおける慣習法の歴史と現在—現代クルグズにかんする2つの研究の紹介を中心に」

コメント(矢島洋一)

3. 総合討論

#### ◆2021/3/19

##### ワークショップ

「アラビア語用OCRの現状と実践」

C01, A01

石田友梨・篠田知暁

1. アラビア語用OCRの現状

2. アラビア語史料をOCRにかけてみよう～実践編～

3. デジタルテキスト化する意義について

4. 質疑応答

#### ◆2021/3/22

##### ワークショップ

「社会関係を記述・表現するためのデジタル・ヒューマニティーズ的手法」

C01, B01

小川潤(東京大学大学院人文社会系研究科)「構造化データとして社会関係を記述する：一次史料の内容表現のための知識グラフ」

ディスカッション

◆2021/3/24

ワークショップ

「条約体制と国際法」 B01, B03

1. 近藤信彰「趣旨説明」
2. 堀井優「近世前半期オスマン・ヴェネツィア条約体制の規範構造」
3. 沖祐太郎「19世紀のエジプトにおける近代国際法の受容」
4. コメント(佐原徹哉)
5. 総合討論

◆2021/3/29

ワークショップ「イスラーム経済のモビリティ」 A01, B01

長岡慎介「イスラーム経済のモビリティとは何か：その歴史的経験と可能性」  
コメント(加藤博(一橋大学名誉教授))・  
ディスカッション



表紙解説

The Reception of the Venetian Ambassadors in Damascus (ダマスカスにおけるヴェネツィア使節団の応接)、ルーブル美術館所蔵。ヴェネツィアの画家ジェンティーレ・ベッリーニ Gentile Bellini (1507年没) の工房において、1511年に描かれた作品。イーワーン(中央に見えるアーチ状の構造物)の前で台座(マスタバ)に座るムルーク朝ダマスカス総督(イーワーンの右手前、白い衣を纏う人物)が、ヴェネツィア領事(イーワーンの中央手前、真紅の長衣を纏う人物)からの手紙を膝に置き、両者の間に立つ通訳による内容の口述を聞いている。その周りには、参列する人々、警備の者などさまざまな人が描かれている。そこに描かれる動物にも注目されたい。左側には中央ユーラシアに生息するヒトコブラクダ、それらと向き合うようにしてサルが描かれる。ひときわ目を引くのは、右手前に描かれる2頭のシカである。おそらく贈り物としてヴェネチアの使節団が連れてきたであろうシカたちは、絵の中に溶け込みつつも、構図、さらには絵の持つ情報にも奥行きをもたらしている。

解説：熊倉和歌子

Image from Wikimedia Commons (Public Domain).

# Islamic Trust Studies News Letter

イスラーム信頼学 News Letter No.01

2021年3月20日発行

文部科学省科学研究費・学術変革領域研究 (A)  
「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：  
世界の分断をのりこえる戦略知の創造」  
(イスラーム信頼学) 総括班事務局  
<https://connectivity.aa-ken.jp/>

[デザイン]  
株式会社 デザインコンビビア

[発行]  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1  
電話 042-330-5600 FAX 042-330-5610  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

\*本誌の無断転載、複製、複写の一切を禁ず。



東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所  
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa  
Tokyo University of Foreign Studies



科研費  
KAKENHI